

医学用語「貧血」について

権 宇琦

1. はじめに

明治初期に、日本ではオランダ医学が退潮し、英米系医学、ドイツ医学が学ばれるようになった。新しい医学理念の受容とともに、新しい医学用語の翻訳も始まった。

「血液」「血液の全身循環」に関する概念については、依然漢方のものも使われたが、病理を究明した西洋医学が伝わったことによって、「血液」に関する知識があらためられた。明治期に活躍した医者たちは、西洋医学書を翻訳するにあたって、既存する言葉が見つからなかったため、新しい言葉をつくらざるを得なかった。「貧血」は、そのときに生まれた医学用語である。

本論文は、「貧血」という語の成立について、それが日本で生まれ、受容された経緯を解明する。また、この語がいつごろ中国へ伝わり、どのように中国語に受容されたのかについても明らかにすることを目的にする。

2. 「貧血」とは

「貧血」はどんな病気なのか、『ブリタニカ国際大百科事典』(2014)には、次のようにある。

(01) 貧血 anemia

正確には、循環している赤血球数とヘモグロビン量が絶対的に減少した状態を貧血というが、実際には、単位体積の血液中の赤血球数またはヘモグロビン濃度が減少した状態をいう。症状は、顔色や皮膚の蒼白、運動時の息切れ、心悸亢進、舌炎、嚥下困難、発熱、黄疸、出血傾向など。治療には、原因の除去（出血の防止、駆虫、感染症の治療など）、脾臓摘出、ACTH、副腎皮質ホルモンの投与、欠乏物質の補給（ビタミンB12、鉄剤など）、輸血などが必要に応じて行われる⁽¹⁾。

また、国立国語研究所「病院の言葉」委員会が2009年に発行した『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』の中では、「貧血」の定義とその症状について以下のように解説している。

(02) 血液中の赤血球や、赤血球に含まれる色素であるヘモグロビンが減り、異常な色素になって、全身の細胞に酸素を運ぶ働きに異常が起きることを「貧血」といいます。酸素を運ぶ力が足りなくなると、疲れやすくなり、動悸（どうき）・息切れ、めまい、頭痛などの症状が起こります。貧血の原

因には、赤血球を作ることができない、赤血球が壊されている、知らないうちにどこからか出血している、などのことが考えられます。

さらに、一般の人がいう「貧血」と、医師の診断の「貧血」とは別の病気であることを説明している。日常語で「貧血」という場合は、主に気持ちが悪くなって立ちくらみを起こして倒れる「脳貧血」のことを指していて、これは「貧血」とは違うので、混同を避ける⁽²⁾ため、病院で使う「貧血」を「血液が薄くなっています」「赤血球が少なくなっています」などと説明し、「脳貧血」を持ち出して、それとの違いを説明する必要があると指摘している。

要するに、「貧血」とは、赤血球や、ヘモグロビンが減っている状態をいうが、普段われわれが簡単に口に出す「貧血」は、気持ちが悪くなったり、めまいを感じたりするときにも用いる。日常生活では差し支えないが、病院で使っている「貧血」は、医者はきちんと患者に説明しなければならないということである。

3. 「貧血」の成立

3. 1 『日本国語大辞典』の記述

「貧血」という語の成立に関する考察の手がかりとするため、『日本国語大辞典 第二版』（ジャパナレッジによる。以下『日国』）を調べたところ、「貧血」だけでなく、「貧血症」も収録されているため、それらの記述を表1でまとめた。

表1 『日国』における「貧血」と「貧血症」の解説と用例

語	【貧血】	【貧血症】
解説	血液中の赤血球ならびにヘモグロビンが減って、健康人の九〇パーセント以下になった状態。からだのだるい、顔色が青白い、また動悸・息切れなどの症状を呈する。出血、栄養不足、骨髄疾患、腎疾患などの原因で起こる。	貧血を主訴とする病気。
用例	<p>* 医語類聚〔1872〕〈奥山虎章〉「Hypohaemia 貧血」</p> <p>* それから〔1909〕〈夏目漱石〉一六「卒倒は貧血（ヒンケツ）の為だと云った」</p>	<p>* 茶話〔1915~30〕〈薄田泣菫〉顔の外れたのを治す法「渋柿の実が貧血症（ヒンケツセウ）のやうに青い顔をしてゐるのを」</p> <p>* 平戸廉吉詩集〔1931〕〈平戸廉吉〉素朴な記号「汝、貧血症患者のデパートメントに我は原始的熱の一塊を見舞はん」</p>

「貧血」と「貧血症」の記述を見ると、「貧血」は病状で、「貧血症」は病気の名称であることがわかる。『日国』の用例のうち、最も早いものは、奥山虎章が編著した『医語類聚』（1872）である。これを手がかりとして、『医語類聚』と同時代（明治初期）に出版されたほかの英米系医学訳書を調べたところ、桑田衡平が訳述した『内科摘要』に、「貧血症」を見つけた。

『医語類聚』増補版の「引」には「第一版ハ明治壬申⁽³⁾初秋」とあり(図1)、『内科摘要』巻一の表紙には「明治壬申初冬新鐫」とある(図2)ので、両書は同時期の成立である。これで、「貧血」の初出については、以下の可能性があると考えられる。

①『内科摘要』と『医語類聚』より以前に「貧血」がつくられ、明治5年にはすでに使われていた。

②二人のうち、いずれかが「貧血」を造語した。あるいは両者で検討を行った。

このうちの①については、筆者の調査の限りでは、『内科摘要』と『医語類聚』より以前に出版された医学書に「貧血」は見つからなかった。周知のように、明治以前の洋学は、蘭医学が主流だったので、「貧血」が現れそうな医学書や蘭和辞書を調べたが、「貧血」どころか、それに近い言葉も現れなかった。ここから、①の可能性は低く、②の可能性が高いと考えられる。

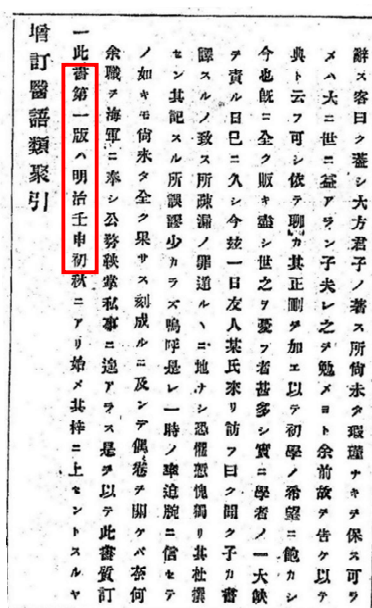


図1 『医語類聚』増補版の「引」

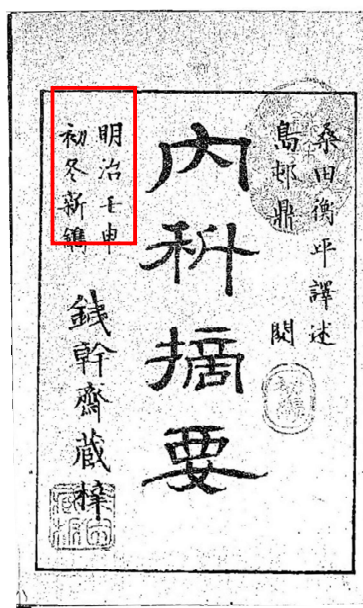


図2 『内科摘要』巻一の表紙

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833035>
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834932>)

3. 2 「貧血」の造語に関わった人々

では、「貧血」は誰が作ったのか、『医語類聚』と『内科摘要』、またこの二冊を書いた著者について調査を行った。結論を先にいえば、「貧血」は、『内科摘要』の著者である桑田衡平の造語だと思われるが、『医語類聚』の著者である奥山虎章も、それに関わっていた可能性がある。

3. 2. 1 『医語類聚』とその著者奥山虎章（および奥山虎炳）

『医語類聚』は、その序文によると、奥山虎章が当時の著名な医語辞典、『動氏医用字書』⁽⁴⁾を翻訳した英和医学辞典である。当時は、学生用の医語辞典はまだ出版されていなかった（深瀬 1996a: 39）。初版は、明治 5 年（1872）に名山閣から出版され、1878 年に増訂版が出版された。

著者の奥山虎章は、慶応 4 年（1868）の 8 月に横浜軍陣病院で勤務したことがあり、同年の 10 月にそこをやめ、東京の大病院に転勤した。そして、明治 3 年（1870）に鹿児島医学校で教師や医員として勤め、明治 4 年（1871）に海軍病院に勤務し、明治 6 年（1873）で海軍大軍医に昇進した。しかし 1 年後に海軍医官を退官した。

奥山は、海軍病院に出仕していたときに、半井成質とともに海軍病院におけるエドウィン・ホイラーの解剖学講義を翻訳し、明治 4 年（1871）に『講筵筆記』として出版した。当時翻訳にあたって適切な訳語が見つからなかったことと、学生のための医語辞典がなかったことが、『医語類聚』編纂の契機になった。

奥山の書いた『講筵筆記』の例言と『医語類聚』の「引」は、兄の奥山虎炳⁽⁵⁾が書いている。奥山虎章がどのように英語を学んだ経緯に関する資料は見つからなかったが、兄の奥山虎炳が、堀達之助から英語を学んでいることから、奥山虎章も同様に堀達之助から英語を学んだことが推測される。少なくとも、堀達之助の影響を受けたと思われる。

3. 2. 2 『内科摘要』とその著者桑田衡平

『内科摘要』は、病気を病理から分析し、その原因と療法とを詳細に記した内科書で、明治期には医学の教科書としても使用された。巻一の「凡例」によると、『内科摘要』の原書⁽⁶⁾は、ハルツホルン⁽⁷⁾氏が 1869 年に出版した「内科総論兼治療法」の第 2 版であり、原著の構成は、第一編が「原病学徴候学一般療法及ヒ諸病ノ分類」であり、第二編が「各病ノ病理及ヒ療法」である。ただし、桑田衡平が訳した『内科摘要』の構成は、原書のままではなく、各項目は病気で分けられ、各病の総合的解説と病理及び療法が合わせて述べられている。

著者の桑田衡平については、半自伝の『思出草』⁽⁸⁾に詳しい。この本によると、桑田衡平は、武蔵国高麗郡（埼玉県）出身で、安政 3 年（1856）に江戸の坪井信道の門に入ってオランダ語や医学を学び始め、坪井信道の媒介によって桑田立斎の婿養子となった。後に坪井信道の門人籍から除名され、杉田玄端の塾に入って勉学を続けた。その後、美濃国加納藩に、藩医として身を置いたが、イギリスの医術研究のために脱藩し江戸へ帰った。明治元年（1868）に、一時期「大病院」で医者をしていたことがあったが、すぐそこを辞退し、明治 2 年（1869）に又大病院医局で勤めるようになった（以下を参照）。

(03) 慶応四年…十一月…下谷大病院雇医ヲ命ゼラレ…雇医ヲ辞退ス。

(04) …明治二年…四月…十七日開成学校雇医命セラレ月俸拾五円賜ハル十月二十五日大学大得業生大病院医局勤務命セラル医術研究ノ為メニ最モ便益ヲ得テ精勤セリ。

その後、明治4年(1871)に陸軍兵部省に転じて、明治8年(1875)に内務省に勤め、明治15年(1882)に病に罹ったことにより、内務省をやめた。

桑田衡平の英語については、『思出草』に、一部の英書と「ゼーゲル」の英蘭対訳辞書を読んで、独学で習得したと書かれている。

3. 2. 3 「貧血」の造語者

奥山虎章と桑田衡平の経歴をみると、2人は、明治元年～2年に、ともに大病院に勤めている。医書の翻訳に熱心な兩人であるから、そのときに交渉があっただろうと思われる。ここから、「貧血」という語は、2人の共同訳である可能性も考えられるが、筆者は、桑田衡平が「貧血」をつくったと考える。

『内科摘要』の「凡例」(図3)によると、桑田衡平は、次のように述べている。

(05) 書中病名薬名等ハ務メテ先哲ノ訳例ヲ襲用スト雖モ亦其新タニシテ訳例ナキ者ハ仮リニ拙訳ノ字ヲ掲ゲテ必ズ其下ニ原語ヲ附ス

ここから推せば、「貧血症」には「原名 アネミア」(図4)がついているので、「貧血」は、桑田衡平による「拙訳」の可能性はある。

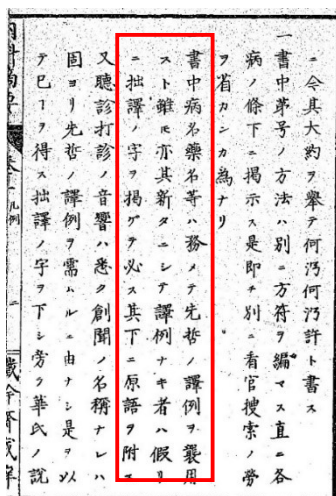


図3 『内科摘要』の凡例

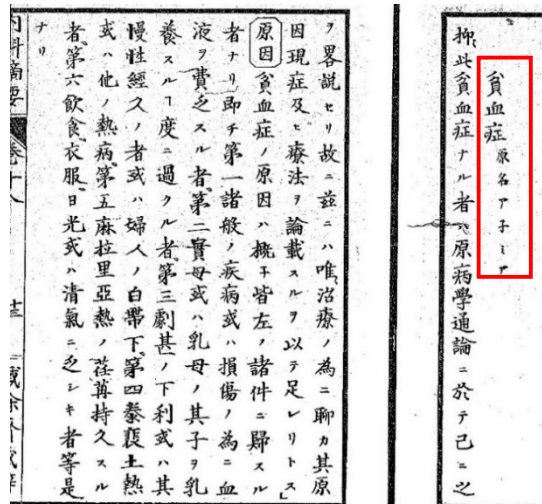


図4 『内科摘要』の「貧血症」

(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834932>)

原書 *Essentials of Principles and Practice of Medicine* で確認したところ、「アネミヤ」は「anaemia⁽⁹⁾」であり、「anaemia」には、次のような解説がある(二重線は筆者による。以下同じ)。

(06) Anæmia is the common term indicating poverty of the blood.

「anaemia」は、本論文の最初にあげた『ブリタニカ国際大百科事典』の「貧血」に対応する英語「anemia」と同じである。原文によると、桑田衡平は、下線の部分「poverty of the blood」を「貧血症」と訳したと思われる。

一方、『医語類聚』では、「貧血」は「hypohæmia」の訳語となっている。「anæmia」の訳語には、「乏血」を用いている。また、『医語類聚』では、さらに「leiphæmia」「hæmataporia」「hæmaporia」といった英語でも、「乏血」または「血液乏少」と訳されている。『医語類聚』の訳語と、原書*A New Dictionary on Medical Science and Literature*⁽¹⁰⁾の語釈を、表2にまとめて示す。

表2 『医語類聚』における「anaemia」及びその関連語の訳語

見出し語	『医語類聚』の訳語	原書の語釈
Anæmia	乏血	privation of blood
Leiphæmia	乏血	poverty or paucity of blood
Hæmaporia	血液乏少	paucity of blood
Hæmataporia	乏血病	paucity of blood
Hypohæmia	貧血	deficiency of blood ⁽¹¹⁾

さらに、堀達之助の『英和对訳袖珍辞書』とヘボンの『和英語林集成』を用いて、語釈に出た「deficiency」「paucity」「poverty」「privation」を調査し、それらの記述を表3でまとめて示す。

表3 『英和对訳袖珍辞書』初版と『和英語林集成』初版における「deficiency」「paucity」「poverty」「privation」の記述

見出し語	『英和对訳袖珍辞書』初版(1862)の記述	『和英語林集成』初版(1867)の記述
deficiency	欠乏. 不足	meri (減り)、heri (減り)、kan (欠)、kakeberi (欠け減り)
paucity	僅少ナルヲ	なし
poverty	貧. 難渋	bimbo (貧乏) konkiu (困窮) hin (貧) madzshiki (貧しき) hinkiu (貧窮)
privation	奪ヒ取ルヲ. 欠ケ. 乏シサ	naki koto (無きこと) arazarukoto (非こと)

表2と表3の記述を対照すると、「leiphæmia」は「貧血」と、「hypohaemia」は、「乏血」か「欠血」と訳されるべきである。また、表2を見ると、奥山虎章は、「貧」より「乏」という漢字を好んでいるようである。

ここで、もう一度『内科摘要』の検討に戻るが、『内科摘要』の原書では、「anaemia」

を「poverty of the blood」としており、「poverty」は、表3によると、「貧」にあたることから、『内科摘要』では、これを「貧血」と訳したと思われる。後ろに「症」をつけた⁽¹²⁾のは、桑田衡平は、「anaemia」を一つの病症にとらえたためと思われる。

以上によって、「貧血症」は、桑田衡平の造語であると考えられる。ただし、「貧血」という語形は、奥山虎章の『医語類聚』の初版⁽¹³⁾に初めて現れている。

3. 2. 4 「貧血」の語構成

「貧⁽¹⁴⁾」は形容詞であり、「血」は名詞で、このような「〈A (形容詞)〉 + 〈N (名詞)〉」の結合は、野村 (1988) の二字漢語の結合パターン「修飾構造」、または「補足構造」に当てはまる。「修飾構造」とは、「難題 (難しい問題)」「幼児 (幼い児童)」「悲劇 (悲しい劇)」などのように、前の形容詞が後ろの名詞を修飾する関係である。しかし、「貧血」は、「貧しい血」ではなく、「血が貧しい」という意味であるため、これに当てはまらない。

一方、「補足構造」における「〈A〉 + 〈N〉」の構造は、「無害 (害がない)」「多才 (才能が多い)」「少数 (数が少ない)」などのように、形容詞と名詞が格関係をなすため、「貧血」は、これに当たると思われる。

しかし、ここで新たな問題が派生する。それは、「補足構造」には、「〈A〉 + 〈N〉」だけでなく、「〈N〉 + 〈A〉」というパターンもある。こちらも、同じく二つの要素が格関係をなす。具体的には、例えば、「胃弱 (胃が弱い)」「性善 (性格が善良)」などのような語である。では、なぜ「貧血」で、「血貧」ではないのか。

まず、両者の形容詞を詳しくみると、「〈N〉 + 〈A〉」では、一般的な形容詞であるのに対して、「〈A〉 + 〈N〉」では、「無」(ない)、「多」(おおい)、「少」(すくない)などが使われている。「貧」は「少」という意味であるため、これに準じて、「貧血」という語順にしたと考えられる。

さらに、明治期に生まれた、英語 (ラテン語、ギリシャ語) を原語による医学訳語には、例えば、次のように、直訳という訳語法を用いてつくられたものが多い (高野繁男 1984)。

(07) Ablepsia 失明症 [ラテン語: a (無) + ギ語: dlepsis (視力) + ia (症)]

(08) Appendicitis 虫垂炎 [ラテン語: appendic (虫垂) + itis (炎)]

Oxford English Dictionary (Oxford英英辞典) と、オンラインの *Oxford learners dictionaries* では、「anaemia」の語源について、次のように記述している。

(09) Anaemia n. Etymology: < modern Latin, < Greek ἀναμία want of blood, < Greek ἀν priv. + αἷμα blood.

Oxford English Dictionary

(10) Anaemia n. Word Origin early 19th cent.: via modern Latin from Greek anaimia, from an- 'without' + haima 'blood'.

つまり、「anaemia」の語形成は次のようになる。

Anaemia [an (貧) + haima (血)]

つまり、「貧血」という語順は、直訳による順番ということになる（「poverty of the blood」は語順に関係していないと思われる）。

4. 日本語における貧血の普及

4. 1 医学書における「貧血」の収録

「貧血」は、『医語類聚』と『内科摘要』に続いて、長谷川泰が訳した『病理摘要』（1875）に収録されている。その序文によると、『病理摘要』は、長谷川泰が『内科摘要』と同じ原書、ハルツホールンの *Essentials of Principles and Practice of medicine* から訳したもので、『内科摘要』の外編に当たる。「両書ヲ合シテ医家必携ノ書」と述べられている（「両書」とは、『内科摘要』『病理摘要』）。実は、『病理摘要』では、先述した (06) の英文が、(11) のように訳されている。ただし、ここでは「貧血症」ではなく、「貧血」と訳している。

(06) Anæmia is the common term indicating poverty of the blood.

Essentials of Principles and Practice of Medicine

(11) 貧血ハ血液乏貧ノ常称ニシテ血質稀薄トナリ…。

『病理摘要』「全身之病態 貧血」

ほかには、例えば、『覇氏病理学』（1876）では、「局処貧血症」という語が出現している。また、翻訳書以外の医書では、『類病鑒法』（1878）に「貧血」が、『民間諸病療治法』（1880）と『新撰方彙』（¹⁵）（1880）に、「貧血病」という語が見られる。

(12) 「其一局処貧血症」ハ血液ノ循行障害サルルカ或ハ廃止スルニ由ッテ其部
及ヒ其器ノ貧血症ヲ発起ス

横地君美訳『覇氏病理学』1876

(13) 貧血ト黄胖ノ区別

鎌田秀夫著『類病鑒法』1878

(14) 貧血病といふは精血の不足して色青白く唇も紅色ならず動すれば少しく
水気あるものにて体の疲労多く…

松本順述『民間諸病療治法』1880

また、医学雑誌『中外医事新報』の第七十一号に、「悪性進行性貧血」という記事が見られる。

(15) 悪性進行性貧血

蘭医ノーレン氏ハ二個ノ悪性進行性貧血患者ヲ解屍シテ胃粘膜ノ組織内ト胃腺ノ局処或ハ全体悉縮ヲ見タリ氏由テ説ヲナシテ曰ク該貧血ハ胃患ノ為メニ誘起セラルハト甚ク多カルヘシト

『中外医事新報』第七十一号 1883

また、「脳貧血」という用語も、この時期の『斯泰涅爾小児科』(1876)や『病理各論』(1880)にすでに見られる(図5、図6)。『斯泰涅爾小児科』には、その症状について、「頭痛、眩暈、五神謬錯、無力…」とあり、『病理各論』には、「患者ノ急に起立スルニ由テ頭部ノ血液チ下降シ以テ昏暈ヲ発スル」とある。これは、『病院の言葉』を分かりやすくする提案』に述べられている「脳貧血」の症状と一致する。

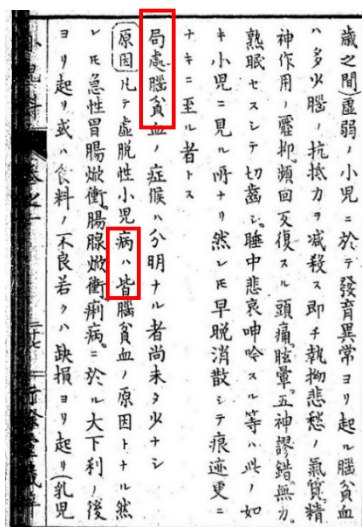


図5 『斯泰涅爾小児科』の「脳貧血」

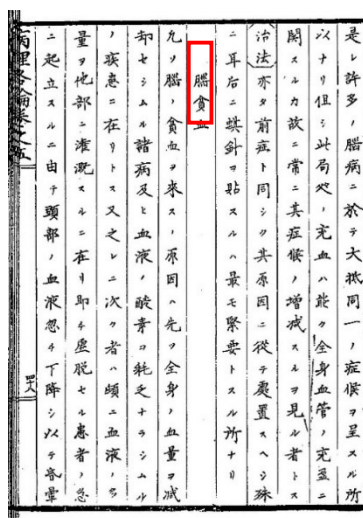


図6 『病理各論』の「脳貧血」

(国立国会図書館デジタルコレクション)

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835458>

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/834101>

4. 2 英和・和英辞書にみる「貧血」

まず『和英語林集成』を見ると、初版(1867)と再版(1872)には「貧血」は未収録であるが、三版(1886)に収録されていることから、「貧血」は、1870~80年代に、一般に普及したことがわかる。その後の対訳辞書には、「貧血」「貧血症」「貧血病」などが収録されている。

表4 英和・和英辞書における「貧血」の収録

発行年	書名	ANEMIA
1867	『和英語林集成 初版』	なし
1872	『和英語林集成 再版』	なし
1886	『和英語林集成 三版』	和英の部 Hinketsu 貧血 (med.) Anemia ----- 英和の部 Anaemia hinketsu (貧血)
1900	『独羅英和医学字彙』	Anamie 貧血病
1910	『和羅独英新医学辞典』	Anaemia 貧血
1931	『研究社新和英大辞典』	貧血 [症] n. (医) Anaemia (米) anemia ～no (の) a. Anaemic. ～suru (する) v. Become anaemic; be impoverished of blood. 貧血して (貧血症に患って) be (suffer from) anaemia.

4. 3 新聞にみる「貧血」

続いて、「貧血」の新聞における使用を見るため、読売新聞のデータベースである「ヨミダス歴史館」を使って、「明治・大正・昭和 (1874～1989)」で「貧血」を「見出し検索」してみたところ、401件ヒットした。そのうち、明治期のものは72件、大正期のものは10件、昭和期のものは319件であった。『読売新聞』の最初の用例は、1882年2月24日の広告である。

(16) 幾那鉄舎利別 効能○^{ちのすくなきやまひ}貧血性諸病○労症○肺病○諸病後○産後

1882.2.24 朝刊

『読売新聞』における「貧血」の複合語は、(16) の「貧血性」のほか、(17) の「慢性貧血」、(18) (19) の「貧血症」などに見られる。

(17) …種々精査せられたるに本病は十二指腸虫に因する^{まんせいひんけつ}慢性貧血即ち十二指腸虫病たる事を証明し…

1890.5.4 朝刊

(18) 独逸国バイエル会社の製剤「ソマトーゼ」ハ^{ひんけつしやう}貧血症のものに最も有効の食料品にて…

1902.5.15 朝刊

(19) 元来日本人は^{ひんけつしやう}貧血症の多き国民にて故榎村博士は之が治療に関して多年

研究し終に成功する。

1907.11.25 朝刊

用例 (20) の「貧血」は、「脳貧血」という意味で使われたと思われる。

(20) 十五日午前十一時ごろ神田錦町一の一湯屋原崎文三方に入浴に来たれる
年齢五十前後地方の商人体の男板間にて^{ひんけつ}貧血を起こし死亡したり

1909.3.16 朝刊

なお、『朝日新聞』の最初の用例 (21) は、『読売新聞』より10日早い。ここから、新聞における「貧血」の使用は、1882年ごろからであるといえる。

(21) 独逸皇帝陛下には先程より不予にあらせられしが右は最早春秋高くいら
せらるゝが為に氣力も前年の如くましまさず又斯く脆弱になり給ひしは
^{ひんけつ}貧血の来す所なりと云ふ

1882.2.24

4. 4 文学作品にみる「貧血」

文学作品における「貧血」の使用を見るため、「青空文庫」と『日本語歴史コーパス』(CHJ)を利用した。

今日、「貧血」という語は、名詞としてしか使われない。しかし、明治・大正期の文学作品では、(22) (23) のように、「貧血な」という形容動詞の用法でも使われている。(22) (23) は、同じ作者、森鷗外(森林太郎)によるもので、両者とも、人の「血色の無く、顔が蒼白であり元気でない」状態を描写するのに用いられている。

(22) 急いで逢ひに出て見ると、長谷川辰之助君は青み掛かつた洋服を着てす
わつてをられた。私の目に移つた人は骨格の逞しい偉丈夫である。浮雲に
心理状態がゑがかれてゐるやうな、貧血な、神経質な男ではない。

森林太郎『長谷川辰之助』1909

(23) 障子が二三寸開いて、貧血な顔の切目の長い目が覗く。微笑んでゐる口
の薄赤い唇の奥から、真つ白い細く揃つた歯がかがやく。

森林太郎『身上話』1910

(24) は、メタファー表現で、「多彩ではない」景色のことを、「貧血な景色」と表現したと思われる。

(24) 故郷を二十年も離れて日本南方の海の明るさに感心し続けて来た感銘では、今故郷の津軽の海を見たとして貧血な景色だと映る位の事で、特別な興味も無からうと思ひながら、G——公園の海水浴場へこれから行くといふ友達一家の人達と、A——市に滞在中の或る日、自動車で押出したことがあつたが、公園入口の松原で皆々下車するあたりから、わたしの見込みは崩れはじめた。

福士幸次郎『地方主義篇（散文詩）』1929

(25) (26) のように、動詞として用いる「貧血」もある。ただし、(25) の場合、連体修飾語として使われているので、形容詞的な性質の用法といえるだろう（これもメタファーであろう）。

(25) この矛盾を解決してくれるものはないか？ 詩にみちた、かぐわしい、帆船時代をとり戻すために？そして貧血した帆船業者を、昔の利潤にありつかせるために？

服部之総『黒船前後』1932

(26) 急いで和尚様のお居間へ入っていくと、もう誰かが運んできたのだらう、つつましくふた品ほどのお菜をのせた渋いろの塗膳を前に、角張った顔を貧血させて和尚様は、キッチンと手を膝の上に、控えておられた。

正岡容『圓朝』1943

また、『日本語歴史コーパス』にも、(27) のような、「貧血症」の比喩的な使い方の用例もあった。

(27) 何処の陰にかくれけん。信仰は、何処の谷にひそみけん。社界は、貧血症となりつか、何んぞ、其血の少なきや。

女学雑誌 無意識論 1895.6

ちなみに、「青空文庫」に収録されている作品には、(28) (29) (30) のように、「脳貧血」の使用がよく見られる。多くの文学者たちは、「貧血」と「脳貧血」とを使い分けているようである。

(28) まったく地獄の苦しみを続けて来たのですから、軽い脳貧血をおこしたらしく、頭が痛む、嘔気を催してくる。

岡本綺堂『指輪一つ』1925

(29) ただその間も彼はたえず自分の眼底に、さまざまの色の微粒子がちらちらしているのをば感じていたが、そのうち不意にエレヴェタアの下降に伴うような感じで彼の全身がすうとしだすのと同時にそれらの幻覚も一時に消え

てしまった。それは明らかに眠りではなかった。それはどこかしら脳貧血に似ていた。

堀辰雄『恢復期』1931

(30) 英介が休暇で戻つてみると、みそのは歌留多で夜を明し、朝になると決つて脳貧血を起した。

牧野信一『淡雪』1936

4. 5 国語辞書における「貧血」の収録

国語辞書では、「貧血」は、『言海』（1889年～1891年）にすでに収録されており、その後、明治期の主な辞書に収録されている。それらの記述を表5にまとめる。当時の辞書の記述は、「体の血液が足りない」といった程度の簡単なものであり、病的な説明は省かれている。

表5 国語辞書における「貧血」の語釈

発行年	書名	「貧血」の語釈
1889～ 1891	『言海』	病ニ因テ血ノ不足ニナル事。
1893	『日本大辞書』	身ニ血ノ量ガ乏シイコト。貧血症
1897	『日本新辞林』	身に血の量の乏しき。
1898	『ことばの泉：日本大辞典』	病の名。血液不足にして、身体を栄養するに適せざるもの。大病の後、産後、胃の慢性病などより起る。
1907	『辞林』	身体の血液が適度の量より少なきと、貧血 「貧血性」 貧血なる体質

4. 6 「NINJAL-LWP for BCCWJ」による「貧血」の文法的性質

現代日本語における「貧血」の文法的性質について、「NINJAL-LWP for BCCWJ」（以下、NLB）を用いて簡単に見てみる。

NLBは、国立国語研究所（以下、国語研）が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）を検索するために、国語研とLago言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。現代日本語の語彙について、実際の用法、たとえば、品詞、コロケーションなどについて調べるのに最も適切なツールであると思われる。

NLBで、「貧血」を調べると、すべて名詞として使われていた。また、コロケーションについては、「貧血を起こす」が最も多く、その次は、「貧血になる」であった。

4. 7 本節のまとめ

「貧血」という用語とその概念は、1875年までに、英語からの医学翻訳書に現れているが、その後、間もなく翻訳書以外の医学書にも現れるようになった。新聞では、1882年ごろから、使用され始め、辞書類では、『和英語林集成 三版』（1886）や『言海』（1889～1891）などに立項されるようになった。ここから、この語は、1890年代ごろに日本語に受容されたといえる。

「貧血」は、明治後期、大正期の文学作品には、形容詞的な使い方や比喩的な使い方も見られるが、現代日本語では、名詞の用法しか持たない。

5. 中国語における「貧血」

続いて、中国語における「貧血」を見ていこう。

5. 1 「貧血」以前に使われた用語

まず、清の時代の来華宣教師が「anaemia」をどのように翻訳しているかを見てみよう。

ホブソンの『医学英華字釈』（1858）では、「anaemia」を次のように訳している。

(31) Anaemia—bloodlessness. 血虚薄皮色白

傅蘭雅が口述し、趙元益が筆述した『儒門医学』⁽¹⁶⁾（1867）でも、「血虚」を用いている（括弧内の日本語訳は筆者による）。

(32) 血虚 血内之血輪甚多用顕微鏡易見之血之紅色藉有血輪身体堅壯者則肌膚有紅色凡紅血每重百分応有血輪十二分不及此数則為血虚或因食物不足以養身或因身本体軟弱或因失血等故其血每重百分只得血輪八分至十分肌膚白舌色亦白眼白帶青綠色其人困倦无精神…（血液中の赤血球は、顕微鏡を用いると見やすい。血の赤色は赤血球による。体が丈夫であれば、肌は赤い色である。血の重さ百分〔50g〕につき、赤血球十二分〔6g〕がふつうであるが、この数に及ばない場合は血虚になる。食物が足りない場合や、体が弱い場合、または、失血などによって、血百分につき、赤血球が八分〔4g〕から十分〔5g〕になると、肌が白くなり、舌の色も白くなり、眼は白く緑色を帯び、疲れやすくなり、元気がなくなる。）

表 6 英華辞典における「anaemia」の翻訳

発行年	書名	Anaemia
1872	『盧公明英華萃林韻府』（ドーリットル）	Anæmia. (or bloodlessness) 血虚薄皮色白
1884	『井上哲次郎訂増英華字典』	Anæmia. Bloodlessness 血虚薄皮色白
1908	『顔惠慶英華大辞典』	Anæmia. (医) 血虚、血虧、血枯
1913	『商務書館英華新字典』	Anæmia, 乏血病

1916	『赫美玲官話』 (Karl Hemeling)	anaemia 血虧、血薄、血貧 (新)、血虚
------	-------------------------	-------------------------

また、英華辞典では、「anaemia」は、『盧公明英華萃林韻府』(1872)に初めて収録され、その後に出版された辞典にほぼ収録されている。主な辞典の記述を表6にまとめ示す。

以上の記述から、「anaemia」の訳語には、主に「血虚」が使われている。『赫美玲官話』には、「血貧」という語が現れており、新語の印がついている。これには、日本語の「貧血」の影響があるかもしれない。

5. 1. 1 「血虚」について

ここで、英華辞典などに出てきた「血虚」について少し触れてみる。

中国伝統医学では、気と血という概念があり、気とは目に見えない生命エネルギーを指し、血とは血液とその働きを指し、気と血は相互に影響しあうとされる。気の量が少なくなる、つまり栄養が不足すると、血の循環が悪くなり、これによってさらに気が足りなくなる。こういう状態を、中国伝統医学で「血虚」と「気虚」という。

この「血虚」という言葉は、前漢(東漢)の張仲景の『傷寒論』と『金匱要略方論』にすでに現れている。

- (33) 陽脈浮陰脈弱者則血虚血虚則筋急也(陽脈が浮き、陰脈が弱ければ、血虚である。血虚は脈が緊張する。)

張仲景(東漢)『傷寒論』

- (34) 寸口脈浮而緊緊則為寒浮則為虚寒虚相搏邪在皮膚浮者血虚絡脈空虚賊邪不瀉 或左或右(寸口の脈が浮にして緊のとき、緊脈は寒証をなし、浮脈は虚証をなす。寒証と虚証がともにあると、邪が皮膚にあり、浮脈で血虚であれば、絡脈は空虚で、賊邪が外に出ず、左や右の絡脈にある。)

張仲景(東漢)『金匱要略方論』

『傷寒論』と『金匱要略方論』は、古くに日本に伝わったため、「血虚」も日本語で使われたと考えられる。ほかに、『日国』には、17世紀の作品に使われている。

- (35) *仮名草子・東海道名所記[1659~61頃] — 「血虚(ケッキョ)すれば脾腎のわづらひとなるといふことを思ひ出して」

- (36) *浮世草子・三島暦[1691] — 「血虚する程血判すべしとは、そも何枚の起請ぞや」

「血虚」が、日本語において、なぜ訳語に使われなかったのかについては、3.2.5で

検討したように、明治期の訳語は、直訳を主としたということのほか、この語では、「体の赤血球数とヘモグロビン量が少ない状態」という、厳密な検査を経ての病状を表すことができないため、新しい概念を表す「貧血」という用語をつくったということがありと思われる。

5. 2 『漢語大詞典』における「貧血」の記述

あらためて「貧血」の検討に戻るが、まず、中国の大型辞典である『漢語大詞典 第二版』（2012）における「貧血」の記述と用例を確認して、中国語における「貧血」の意味用法を簡単に把握しておく。

(37) 貧血

人体血液中紅血球的数量或血紅蛋白的含量低於正常的數值時叫做“貧血”。貧血的人面色蒼白。通常局部血量減少也叫貧血，如腦貧血。（人体の血液中の赤血球の数やヘモグロビンの含有量が正常な値より低い場合を「貧血」という。貧血の人は顔面が蒼白である。通常局部の血量が減少することも貧血という。例：脳貧血。）

※老舍《四世同堂》十八：“他的薄嘴唇緊緊的閉上，貧血的腦中空了一塊，像個擱久了的雞蛋似的。”（彼の薄い唇はしっかりと閉じられ、血の通わない脳の中はからっぽになり、長い間放置された鶏の卵のようであった。）

※王西彦《一個小人物的憤怒》：“迎面走來的，就是那有着一張瘦削的貧血臉和一個細小的紅鼻子的女人。”（向こうからやってきたのは、やせて貧血気味の顔と小さく赤い鼻をもつ女性だった。）

上の「貧血」は、語釈によると、日本語における「貧血」と相違がない。特に「脳貧血」を「通常貧血という」ということも指摘している。ただし、『漢語大詞典』があげている例における「貧血」は、いずれも形容詞的に用いられている。

5. 3 「貧血」の中国への伝来

5. 3. 1 書籍における「貧血」

「貧血」が中国へ伝来した年代については、『近現代辞源』（2010）における「貧血」の記述が参考になる。

(38) 貧血

①人体血液中紅細胞的数量或血紅蛋白的含量低於正常值時称作貧血。（人体の血液中の赤血球の量やヘモグロビンの含有量が正常値を下回るときのことを貧血と称する。）

1907年孫[佐] 訳述 生理衛生新教科書 第五篇：“白血輪過多，則成白血病，与失血及由他病而患貧血病者同，不但顔无血色，即全体之皮膚亦呈蒼白色，是為危險之病症。”（白血球が多すぎると白血病になる。失血や他の病気により貧血を患う人と同じで、顔に血色がないだけでなく、体全体の皮膚も蒼白になる。これを危険な病症となす。）

②局部血量減少。（局部の血量の減少。）

1924年程瀚章 運動生理 各論：“此時肺臟強度充血，大循環貧血，其結果同時引起心臟疲勞，顔面蒼白。”（この時肺臟は強度に充血し、大循環系は貧血になり、その結果、同時に心臓の疲勞を引き起こし、顔面は蒼白になる。）

『近現代辞源』の最初の用例の出典『生理衛生新教科書』（1907）は、孫佐が日本の三島通良が書いた『中等生理衛生教科書』（1905）を翻訳したものである。この時代の日本の医書を翻訳した医学書、例えば、『医学指南』（1908）、『漢訳実用法医学大全』（1909）、『診断学』（1918）などにも「貧血」「貧血症」が見られる。

(39) 貧血，即血虚。（貧血、即ち血虚。）

丁福保訳編『医学指南』1908

(40) 腹腔内出血亦甚多至其出血量過大時即全身發極重之貧血症。（腹腔内出血もその出血量が多くなりすぎると全身に極度の貧血症が起こる。）

王佑・楊鴻通編訳『漢訳実用法医学大全』1909

(41) 但慢性鼻炎，往往亦見此色，反乎此而現蒼白色者，為一般貧血症。（しかし、慢性鼻炎に、しばしばこの色を見る。逆に蒼白な色が現れるなら、一般貧血症である。）

湯爾和訳『診断学』1918

なお、中国人が書いた医学書『房中医(実験良法)』（1915）にも、「貧血」が現れている。

(42) 其失血甚者，必陷于貧血。面色蒼白。頭暈、眩暈。心悸亢進。至可危也。（出血がひどいと、必ず貧血に陥る。顔面が蒼白になる。めまいがする。心悸亢進になる。危険に至る。）

顧鳴盛編『房中医（実験良法）』1915

また、「中国現代第一部百科全書」といわれる『普通百科新大詞典』（1911）にも、「貧血」は収録されている。

- (43) 貧血 由強度之出血-惡液疾-腸寄生虫。慢性化膿症而起。有皮膚及粘膜之蒼白色-動悸-耳鳴-頭痛-眩暈-噁氣-嘔吐-脉搏及呼吸頻促等症。(強度の出血、惡液疾患、腸寄生虫、慢性化膿症により起こる。皮膚や粘膜が蒼白になり、動悸、耳鳴り、頭痛、眩暈、げっぷ、嘔吐、脈拍や呼吸の異常などの症状が見られる。)

5. 4 雑誌や新聞における「貧血」

雑誌や新聞における「貧血」の最も早い登場は、『申報』の1902年12月31日の記事で、「脳貧血症」という語で現れている。

- (44) 日本某日報云美利堅国新簡駐日使臣拔之苦氏於東歷十二月二十五日在千葉縣新浜為射鴨之戲上午十一下鐘時突患脳貧血症倒仆於地。(日本の某日報によると、アメリカの新駐日公使のバック氏は、(十二月二十五日に)千葉縣新浜で鴨猟の最中に、午前十一時に脳貧血症で倒れた。)

『申報』「美使示疾」1902.12.31

ただし、(44)の例は、「脳貧血症」である。「貧血(病)」としての最も早い用例は、1903年の「新民叢報」のもので、これは、『近現代辞源』が挙げている用例より年代が早い。

- (45) 巴黎之医学博士某曾乘氣球航行空中二時間之後忽見血輪驟増後十余日再為試驗効亦如前故報告其医会謂苟患貧血病之人使其於数週間為二回之空中航行比之転地療養三月其効尤著云(パリのある医学博士は熱気球で空中を二時間飛行した後に、急に赤血球が急増した。それから十数日後に再び実験を行ったところ、結果は前と同じであった。そこで、医学会に、貧血症を患っている人が、数週間に2回空中飛行を行えば、転地療養を三か月行うより効果が甚だしいと報告した。)

『新民叢報』27「新智識之雜貨店：輕氣球之療病」1903

『申報』の検索システムによって、「貧血」を検索すると、「広告」を含めて、8623件ヒットした。ここから、「広告」を除いて再検索しても、1753件という歴大な用例数であった。「貧血症」という語は、1908年3月16日の「人造自来血」という広告に初めて現れる。この広告は、3月16日から、4月29日まで毎日『申報』に載せられていた。

- (46) 此自来血乃集合衆補血品製煉而成色紅味甜較之鉄汁功力尤大且最適口世之患貧血症者(この「自来血」は多くの補血品を集めて製造したもので、

赤い色と甘い味であり、鉄汁より効果が大きく、貧血症を患う者に最適である。)

『申報』「人造自来血」1908.3.16

また、『東方雑誌』や『新青年』にも、同じ用法の「貧血」と「貧血病」が見られる。

- (47) 栄養療法。通称食物養生法。乃對於神經衰弱者及陷於貧血之狀態者之特種療法也。(栄養療法は、俗に食物養生法という。神経が衰弱した者や貧血の狀態に陥った者に対する特殊な療法である。)

『東方雑誌』「食物養生法」1911-2

- (48) 一種食物既然不易消化，就有兩種毛病其一，食了未曾溶解，即排泄而出，雖有滋養料，亦不能提出補益身體，其結果，必成為貧血病，精神日漸萎頓，不堪作事漸致不能支持身體。(ある食物が消化しにくいと、二つの問題が起きる。一つは、食べ終わって消化されずに、すぐに排泄されることで、栄養があっても、体に吸収することができない。その結果、必ず貧血症になり、精神が日ごとに衰えていき、何もできなくなり、次第に体を支えることができなくなる。)

『新青年』「白話文的価値」1919.4.15

また、(49) (50) (51) の「貧血病」「貧血症」は、比喩的な使い方で、それぞれ「経済」「革命文学」「北平」などの状態を表しており、それらの現状が栄養不足のような状態を表している。

- (49) 我們可以很明白地看出，在帝国主义經濟侵略的下面，中国的經濟情形，是完全停滯在貧血病式的狀態之下。

(帝国主義の經濟の侵略の下で、中国の經濟狀況は、完全に停滯して貧血病のような状態にあることがはっきりわかる。)

『申報』「反对階級門爭擁護勞資合作」1933.7.9

- (50) 救治革命文学的貧血症 (革命文学の貧血症を救う。)

『文芸先鋒』1-1 1942

- (51) 北平在患著貧血症 (北平は貧血症を患っている。)

『民主与統一』33 1947.4

6. まとめ

ここまで日中における「貧血」を調査・考察した結果をまとめてみる。まず、明治期に活躍した医師の桑田衡平が、1872年に、「anaemia」を訳す際に「貧血症」という語を使った。ただし、「貧血」という形が初めて現れたのは、同じ年に出版された英和医学辞書の『医語類聚』である。

「貧血」あるいはこの概念は、その後、すぐにほかの医書にも収録された。『内科摘要』は当時の医学生向けの教科書のようなものであり、また、『医語類聚』も英語を学ぶ医学生が非常に愛用した辞書であったため、両書によって、「貧血」の普及が促進されたと考えられる。その後、「貧血」は、新聞や雑誌でも使用されるようになり、国語辞書にも早くに収録されている。「貧血」は、1890年代ごろには、ほぼ定着したと考えられる。

中国語においては、「貧血」が伝来する以前には、このような概念を表すのに、中国伝統医学用語である「血虚」などの語が用いられていたが、1900年代に入ってから、「貧血」が日本の医学書を翻訳した書籍に現れ、その後徐々に中国人が書いた医書や新聞雑誌にも現れるようになった。資料を調査すると、1949年の中国建国以前に、「貧血」には、すでに大量の例があり、その中には、形容詞的な使い方、比喩的な使い方でも用いられているものもある。つまり、「貧血」は、中国へ伝来して以来、抵抗なく中国語に受容され、使用されるようになったといえる。

7. 「虚血」と「貧血」

「貧血」と似た用語に「虚血」がある。中国語には、「血虚」という語はあるが、「虚血」は使われない。中国語の検索サイトや資料などを調べたが、「虚血」の用例は見つからなかった。ここでは、日本語における「虚血」と「貧血」にはどのような違いがあるのかについて、見ていく⁽¹⁷⁾。

7. 1 「虚血」の用法（付「乏血」）

日本の中型国語辞書、『広辞苑』『大辞泉』『大辞林』には、すべて「虚血」が収録されている。それらの記述を、表7にまとめて示す。

表7 『広辞苑』『大辞泉』『大辞林』における「虚血」の記述

発行年	書名	「虚血」の語釈
2008	『広辞苑 第6版』	急性の局所性貧血のうち、特にその程度が重く、流入血液量が極度に減少した状態。血管の結紮狭窄血栓などの場合に見られる。
2012	『大辞泉 第2版』	組織や臓器への動脈血の流入が減少あるいは途絶すること。乏血（ぼうけつ）。
2019	『大辞林 第4版』	臓器や組織に流入する血液の量が必要量に比し著しく減少した状態。その部位に変性・萎縮（いしゅく）・壊死（えし）などをきたす。乏血。

また、『医学英和辞典』（第2版 研究社）には、「虚血」について、次のような記述

が見られた。

(52) Ischemia -chae-

虚血、乏血、阻血 血流障害による局所的血液不足

これらの辞書の記述を見ると、「虚血」は、体の局部が急に貧血になった状態をいい、「貧血」の下位分類の一つであることがわかる。また「虚血」の同義語は、「貧血」ではなく、「乏血」であることも確認できる。

次に、「虚血」の使用について、資料に当たってみる。

まず『日本語歴史コーパス』には、「虚血」の用例は一例もなかった。「国立国会図書館デジタルコレクション」の検索では、1912年10月発行の雑誌の記事の題名が最初の用例であった。

(53) 「モムブルヒ氏虚血法ト副腎被囊」

『中外医事新報』 763 1912.10

しかし、その後「虚血」の用例は見られず、再び用例が現れるのは、1950年代になってからである。『日本産科婦人科学会雑誌』に「虚血」が使われている。

(54) 腎の虚血であるという意見を否定している。即ち彼等はRBFは正常か又はそれより高値を示したと述べている。

「産婦人科領域に於ける腎機能に関する研究：特に腎血流量、腎血漿流量並びに濾過率に就いて」『日本産科婦人科学会雑誌』 6-11 1954.10.1

(55) …ひいては内膜の虚血を来たすと述べているが、両説共に月経の発来に対してはAchの存在並びに作働が必要である点で一致し、又同様の機序が機能性出血その他の月経異常にもあてはまるだろうことも想像される。

「子宮におけるAcetylcholin様物質の消長に就いて」

『日本産科婦人科学会雑誌』 11-12 1959.11.1

「虚血」は、単独で使われるより、(56) (57) のように、「脳虚血」「虚血性心疾患」といった複合した形で現れることが多い。

(56) Hossmanらは脳への流入動脈をすべて結紮して、完全な脳虚血

(complete global ischemia : CGI) を作製し、それによる脳の. anoxic-ischemic lesionを検索した。

「急性頭蓋内圧亢進の脳微小循環に及ぼす影響について」『神経外科』 16-5 1976

(57) ノイキノンの成分ユビデカレノンは、代謝性強心剤として慢性高血圧

症、虚血性心疾患、弁膜疾患など心機能低下によって起こる。

「ノイキノン顆粒の配合変化に関する研究」『病院薬学』4-1 1978.5.20

また、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)で「虚血」を検索すると、266件ヒットした。そのうちの74件が「虚血性心疾患」であった。

(58) …わが国の3~4倍にも達している。しかし、我が国においても、近年心筋梗塞などの虚血性心疾患による死亡が増加しつつある。我が国の循環器疾患対策は最も大きな危険因子…

厚生省『厚生白書 昭和56年版』1981

また、「虚血再灌流障害」が16件あった。これは、すべて同じ作者による同一の書籍の用例である。

(59) 多くの臓器における虚血再灌流障害の治療に役立つものと思われる。

佐藤泰史『臓器の虚血再灌流障害』2002

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に現れる「虚血」の「メディア／ジャンル」は、ほぼ「書籍／自然科学」に限られ、現代日本語の「虚血」は、専門分野でしか使われない語であることが確認できる。

次に、「虚血」の同義語である「乏血」についても少し調べてみた。表2に示したように、「乏血」は、実は、『医語類聚』において、「anaemia」および、その類義語の訳語として現れている。『医語類聚』と同時期に出版された医書では、例えば、『病理略論』⁽¹⁸⁾や『医療大成』に「乏血」が見える。

(60) 例之動脈系ニ劇シキ損傷ヲ被リ過多ノ失血ニ由テ心臓ノ権縮其常ヲ失ヒ以テ遂ニ此機能ヲ全ノ廢スルカ如シ乃チ此等ノ乏血症ニ死スル者ヲ剖観スルニ…

『病理略論』巻下 1871

(61) 其三 乏血病 アネミア
乏血ハ血液ノ減耗スル者ナリ

『医療大成』1875

しかし、その後にほとんど用例がなく、1950年代に入って、『日本産科婦人科学会雑誌』に再び「乏血」が使われている。

(62) 後者の場合は、手術す可きで無い。この両説はシ[ショック]を考慮せずに乏血に重きを置いて樹てられたものであるが、私は茲に外妊の死因は、乏血で無く、是れに依て惹起せられた失血シ[ショック]の為である

と考察する。

「子宮外妊娠の手術施行の時期並びに其療法」
『日本産科婦人科学会雑誌』 4-1 1952.1.1

「乏血」は、今日、日本の主な国語辞典には収録されていない。ただし、『医学英和辞典』（第2版 研究社）には、前述した「ischemia」と、下記にあげる「oligemia | oligemia」に「乏血」が見られる。

(63) oligemia | oligemia

血液過少 [減少] (症)、乏血 (症) 血液量の不足

以上の考察を通して、「虚血」と「貧血」の違いをまとめる。まず「貧血」は日中両言語において使われるが、「虚血」は、日本語でしか使われない語である。日本語においては、「虚血」は、「局所の貧血」という意味で、「貧血」の下位分類に属する。「虚血」は、医学に関する文章でしか使われない用語であり、「虚血性心疾患」という複合形での使用頻度が最も高い。また、現代日本語では、「虚血」と「乏血」とは、ほぼ同じ病状を表す。この二語は、『日本産科婦人科学会雑誌』という雑誌で使用され始めたことから、最初に妊婦や婦人病に関する説明に使用され、その後だんだんほかの病気に関しても使われるようになったようである。

7. 2 「虚血」の語構成

「虚血」は、中国伝統医学で使用された「血虚」の語順の逆転による造語で、これは、「貧血」「乏血」などの語構成に合わせたものと推測される。よって、「虚血」の語構成も、「〈A〉 + 〈N〉」という「補足構造」である。

参考までに、『医学英和辞典』で「虚血」の原語としている「ischaemia」について、*Oxford English Dictionary*と*Oxford learners dictionaries*で調べてみると、その語源については、次のようにある。

(64) Etymology: modern Latin, < Greek ἵσχυμος stanching or stopping blood, < ἵσχειν to hold + αἷμα blood.

Oxford English Dictionary

(65) Word Origin: late 19th cent. (denoting the stanching of bleeding): modern Latin, from Greek iskhaimos 'stopping blood', from iskein 'keep back' + haima 'blood'.

Oxford Learner's Dictionaries

いずれも「血を止める」というような意味で、「虚」には結び付けにくい。したがって、「虚血」は、「血虚」の語順を逆転させることによって、新しい意味を付与し、

つくられた語であると思われる。

【注】

- (1) 貧血には種々のものがあり、『ブリタニカ国際大百科事典』によると、M. M. ウィントローブは次のように分類している。(1) 大赤血球性貧血 赤血球の平均容積が正常より大きい貧血で、悪性貧血、葉酸欠乏による貧血などがこれに属する。(2) 正赤血球性貧血 赤血球の容積が正常範囲内にあるもので、急性出血、溶血性貧血、再生不良性貧血、妊娠による貧血などがある。(3) 低色素性、小赤血球性貧血 赤血球の容積が正常より小さく、ヘモグロビンの含有量も少ないもので、鉄欠乏性貧血、サラセミア、鉄芽球性貧血などが属している。
- (2) 『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』では、一般の人々の「貧血」の認知率は極めて高いが(99.7%)、その意味を「赤血球が減る病気」と正しく理解している人は「必ずしも多くない」(理解率77.0%)と説明している。
- (3) 明治壬申は、明治5年1月1日(1872年2月9日)～明治6年1月12日(1873年1月12日)である。この間に、太陽暦が採用され、明治5年12月2日の翌日が明治6年1月1日になった。
- (4) 深瀬(1996b)によると、『動氏医用字書』の著者のロブリー・ダングリソン Robley Dunglison(1798-1869)は、イングランドのケスウィックに生まれ、エディンバラ大学を卒業した。1825年に招請をうけてアメリカにわたって教授に就任した。1833年にメリーランドで大学教授として勤め、1836年からジェファーソン医科大学教授に就任して33年間その地位にあった。ダングリソンは、解剖学、薬物学、外科学、生理学のほか、医史学の講義もおこなっている。レスリー・モートンによると「ダングリソンはイギリス生まれのアメリカでの最初のフルタイムの教授。生理学教科書、医学辞典、医史学の最初の著者」であるという。『動氏医用字書』(*A New Dictionary on Medical Science and Literature*)の初版は、1833年に出版され、『医語類聚』が出版された1873年までに17版を重ねている。第二版から、書名を *Medical Lexicon* にあらためた。
- (5) 深瀬(1996a)によると、奥山虎炳は、明治2年(1869)3月に大病院三等医師係に就任し、同年12月に大学校中助教に昇進した。明治4年(1871)9月に大学から兵部省に転属になり、翌年2月に兵部省が陸海軍の二省に分離したさいに海軍省に出仕した。明治6年(1873)には、大医監(大佐相当官)になった。
- (6) 原書は、*Essentials of Principles and Practice of Medicine* (1869) である。
- (7) Henry Hartshorne (1836-1905) は米ペンシルヴェニア大学の内科学、保健学助教。
- (8) 『思出草』は、桑田衡平の自伝をその子供たちが編纂し、冊子としてその家族親戚に配布したもののである。桑田衡平は『思出草』の巻頭で、「只子孫ニ示スノミ他見ヲ許サズ」と述べているが、歴史的価値を鑑み、子孫の一部の許しを得て公開されたようである。編纂時期は不明だが、1900年前後のようである。
- (9) OEDの「anaemia」の項目によると、「anaemia」は「British English」の綴りで、「anemia」は「North American English」の綴りである。資料中には、「anaemia」という綴りもあるが、本論文では、引用部分は原文のままとするが、それ以外は、すべて「anaemia」に統一する。
- (10) 調査には、初版(1833)のものを用いている(*Medical Lexicon* も調べたが、記述は全く同じである)。
- (11) 原書には、「hypohaemia」に「hypæmia」とあり、「hypæmia」に「deficiency of blood」とある。
- (12) 『内科摘要』の原書には、「症」にあたる言葉がないため、桑田衡平がつけたと思われる。
- (13) 『医語類聚』の増補版には、「hypohaemia 貧血症」とある。
- (14) 『全訳 漢辞海 第四版』(2017)には、「貧」は、「[1]《形》①まずしい・マツシ。…

(ア) 財産や衣食に欠乏するさま。困窮したさま。… (イ) 学問や能力がとぼしい。物事が欠けているさま。… [名詞化] (ア) 困窮した人。(イ) 困窮の状態。まずしさ。 ②僧や道士がが自称するときに冠することば。…」とある。

(15) 小見出しに「貧血病」とある。

(16) 『儒門医学』は、海得蘭が編纂し、傳蘭雅が口述し、趙元益が筆述した。江南制造局が出版した。

(17) これについて、拓殖大学の丸山浩明教授（中国語・中国文学）のご示唆を受けた。

(18) 『病理略論』は、長崎精得館の教師・蘭医のマンズフェルトの講義を筆記して翻訳したもの（山田某所持）を、明治辛未（1871）春2月に、「某教官」の題言を添えて、東京医学校官版として英蘭堂島村利助より発行したものである。上下2巻に分かれる。

【参考文献】

阿知波五郎（1982）『近代日本の医学：西欧医学受容の軌跡』 思文閣

大滝紀雄（1995）「幕末から明治中期にかけての英米系医学の受容」『日本医史学雑誌』41-2 日本医史学会

高野繁男（1984）「明治期・医学用語の基本語基と語構成：「医語類聚」の訳語」『人文学研究所報』18

野村雅昭（1988）「二字漢語の構造」『日本語学』7-5

深瀬泰旦（1995）「海軍大医監 奥山虎炳（1840～1926）」『日本医史学雑誌』41-3 日本医史学会

深瀬泰旦（1996a）『「医語類聚」の著者 海軍大軍医 奥山虎章』『日本医史学雑誌』42-1 日本医史学会

深瀬泰旦（1996b）『「医語類聚」（奥山虎章）と Medical Lexicon (Robley Dunglison)』『日本医史学雑誌』42-2 日本医史学会

文化新聞（2017）「桑田衡平の生涯と業績 医学書翻訳で近代医学の礎築く」『文化新聞』2017.7.12

三浦於菟（2014）『「気・血・水」の流れが健康をつくる：「漢方の原則」で病気知らずに!』 プレジデント社

李迪・郭世荣（2002）「中国現代第一部百科全書：《普通百科新大詞典》」『辞書研究』2002-3 内蒙古師範大学科学史研究所

【参考サイト】（いずれも最終閲覧は、2021 月 1 月）

青空文庫 www.aozora.gr.jp

英華字典 <http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/enter.php>

研医会通信 「眼科要論」129号 2016.4.12 <http://www.ken-i-kai.org/homepage/index1604.html>

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）<https://shonagon.ninjal.ac.jp/>

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>

国立国語研究所「病院の言葉」委員会（2009）『「病院の言葉」を分かりやすくする提案』
<https://www2.ninjal.ac.jp/byoin/teian/ruikeibetu/teiangou/teiangou-ruikei-b/hinketu.html>

国立国語研究所 (2020) 『日本語歴史コーパス』 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/
(2020 年 1 月 10 日確認)

申報 <http://10.1.30.77.z.library.sh.cn/>

全国報刊索引 <https://www.cnbsy.com/>

NINJAL-LWP for BCCWJ <https://nlb.ninjal.ac.jp/>

Oxford English Dictionary (Oxford 英英辞典) <https://www.oed.com/>

Oxford Learner's Dictionaries <https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/>

【辞書類】

対訳辞書類

『医学英和辞典 第2版』(2008) 研究社

『デジタル和英語林集成』 明治学院大学図書館 <http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/>

『英和对訳袖珍辞書』(1862) 蔵田屋清右衛門

『独羅英和医学字彙』(1900) 南江堂

『和羅独英新医学辞典』(1910) 南江堂

『研究社新和英大辞典』(1931) 研究社

日本語辞書類

『言海』(1891) 大槻文彦

『ことばの泉：日本大辞典』(1898) 大倉書店

『辞林』(1907) 三省堂

『日本大辞書』(1893) 日本大辞書発行所

『日本新辞林』(1897) 三省堂

『日本国語大辞典』第二版(2003) 小学館

『広辞苑 第6版』(2008) 岩波書店

『大辞泉 第2版』(2012) 小学館

『大辞林 第4版』(2019) 三省堂

中国語辞書類

『漢語大詞典』(2001) 上海辞書出版社

『近現代辞源』(2010) 上海辞書出版社